

# 東日本大震災における交通インフラ復旧と地域住民の復興実感の関係 —岩手県宮古市に住む祖父母への聞き取り調査から—

遠洞 彩 (大矢根ゼミナール)  
HS22-1047B

## 論文の目次

概要	
論文構成図	
目次	
はじめに	
第 1 章 論文課題・仮説・方法論	1
第 2 章 岩手県宮古市・岩手県北バス・三陸鉄道について	5
第 3 章 復旧・復興	9
第 4 章 岩手県宮古市での非参与観察	16
第 5 章 祖父母への聞き取り調査 (半構造化インタビュー)	22
第 6 章 考察	28
第 7 章 結論	32
おわりに・反省	33
謝辞	34
図表・写真一覧	35
参考文献・Web ページ	36

## 巻末資料

祖父母への聞き取り調査	1
-------------	---

## 論文の要旨

### 1. 論文課題・方法

筆者の祖父母 (85 歳、80 歳) は岩手県宮古市に住んでいる。2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により、東北地方は甚大な被害を受けた。岩手県宮古市もその被災地の一つである。そんな中、三陸鉄道や岩手県北バスといった交通インフラが早期復旧を果たし、三陸鉄道は復興のシンボルとされている。

筆者はこういった交通インフラの復旧が、地

域住民の復興実感に与えた影響について興味を持った。そこで、祖父母への震災時の様子について聞き取り調査などから、彼らの日常生活や心の動きから、交通インフラがライフラインとしてどのような役割を果たしているのか、そして地域とのつながりや地域住民の復興実感がどのように形成されてきたかを明らかにしていくこととした。

### 2. 仮説

本論文においては、防災社会工学者・中林一樹 (2020) の論文「日本における「復興」とは何か」を用いて、被災前の状態・機能に戻すことを復旧、当事者である被災者が「被災前に戻る目標」を設定して取り組むことを復興ととする定義付けを採用した。そのうえで、「地域住民にとって重要な足である交通インフラの復旧は、地域住民に生活の安心感をもたらす、復興実感を高めるだろう。」という仮説を立てた。

### 3. 主な知見

3 月と 11 月に岩手県宮古市で行った非参与観察より、宮古～盛岡間を結ぶ「106 特急バス」の利用者の大半が高齢者であり、バス停での会話の様子から通院にバスを利用していることが明らかとなった。その他のバス利用客の様子や駅構内の様子から岩手県北バスや三陸鉄道は地域住民が生活していくにあたって、必要不可欠な存在であることが把握できた。

また、祖父母への聞き取り調査から、祖父母は自家用車の利用が主であり、三陸鉄道や岩手県北バスの日常的な利用は限定的である一方で、利用する機会の多さに関係なく、「三鉄やバスが走っているだけで安心」と繰り返し述べていたことから、岩手県北バスや三陸鉄道がただの移

動手段としての役割だけでなく、地域社会が継続していることや存在を象徴する意味を持っていると理解するに至った。

また、三陸鉄道が走り出した際に汽笛の音を聞いて線路から手を振っている地域の人がいたと語られていたことから、祖父母だけでなく地域住民にとっても三陸鉄道が走っていることの大きな意義、三陸鉄道に対する愛着や運行再開に対する喜びの感情が把握された。

#### 4. 考察と結論（残された課題）

岩手県宮古市内での非参与観察からは、岩手県北バスおよび三陸鉄道が現在においても地域住民の通院や日常移動の手段として安定的に利用されており、地域住民の生活を支える「ライフライン」として機能し続けていることが確認された。また、三陸鉄道は単なる移動手段にとどまらず、「復興のシンボル」（佐藤 2018）として、また、地域に人の流れや賑わいを生み出す役割も担っていることが理解できた。

さらに、祖父母への聞き取り調査からは、日常的な利用頻度が高くないにもかかわらず、「走っているだけで安心」「三鉄が走っていると宮古に人がいると感じる」といった語りが得られた。このことから、交通インフラの復旧は、実用的な移動手段の回復という側面だけでなく、生活安心感を住民にもたらしていることが明らかとなった。三陸鉄道や岩手県北バスの復旧と継続的な運行は、今後においても地域住民の日常生活と地域社会の存続を支える必要不可欠な存在であり続けるといえる。

これらの結果から、地域住民にとって重要な足である交通インフラの復旧は、地域住民に生活安心感をもたらし、復興実感を高めていると結論付けた。

一方、今回の聞き取り調査対象者は祖父母 2 名に限られており、断片的な地域観察（非参与観察）で、調査地域や世代も限定的であるという課題が残った。今後は、交通インフラの通勤や通学利用者、観光客など、より多様な立場の方々に関する諸データを渉猟することで、交通

インフラの復旧が地域住民の復興実感に与える影響をさらに多角的に明らかにできると思われる。

#### 主要参考文献

- ◇川見文紀・林春男・木村玲欧・田村圭子・井ノ口宗成・立木茂雄, 2018, 「生活再建 7 要素が東日本大震災被災者の生活復興感に与える影響—4 震災から 5 年が経過する中での東日本大震災生活復興調査から—」『地域安全学会論文集』33:53-62.
- ◇佐藤年緒, 2018, 「被災地で「復興のシンボル」が成立する条件の研究—東日本大震災での 4 事例を踏まえて—」『実践政策学』4(2):191-204.
- ◇鈴木文彦, 2018, 『東日本大震災と公共交通 I—震災を乗り越え甦る鉄路とバス—』, クラッセ.
- ◇塚田伸也・森田哲夫, 2019, 「東日本大震災被災地における復興実感度と生活質評価に関する研究—宮城県石巻市の仮設住宅を事例として—」『実践政策学』5(2):129-138.
- ◇中林一樹, 2020, 「日本における「復興」とは何か—成長社会の復興と持続可能社会の復興—」『日本災害復興学会論文集』15:1-10.
- ◇藤生慎ほか, 2012, 「東北地方太平洋沖地震における三陸鉄道の被災と復旧—現地調査・ヒアリング調査にもとづく考察—」『日本地震工学会論文集』12(4):189-200.
- ◇牧紀男, 2020, 「東日本大震災における津波震災地の復興—復興から生まれた新たな取り組みを次の災害にどう活かすのか—」『日本災害復興学会論文集』15:75-80.
- ◇森和也・藤田光弘, 2013, 「岩手県の交通の被災状況と課題」『福祉のまちづくり研究』15(1):4-8.
- ◇土屋依子・中林一樹・小田切利栄, 2014, 「被災者の復興感からみた東日本大震災の生活復興過程—大船渡・気仙沼・新地の 3 ヶ年の被災者調査から—」『地域安全学会論文集』24:253-261.